平成29年度　学校評価総括表

奈良県立橿原高等学校

奈良県教育振興大綱基本理念	育人　～県民一人一人が学び、育ち合い、潜在能力を最大限引き出す～	総合評価
教育目標	豊かな潜在能力を開花させ、知の創造を高め、豊かな感性を磨く。	
学校経営方針	進路第一希望の実現、人間力の向上	

昨年度の成果と課題	平成29年度本校教育のキーワード	具体的目標	総合評価
生徒は総合的な学習の時間をはじめとして参加体験型学習を積み重ね、キャリア教育の視点も踏まえながら個々の課題解決に向けて主体的に活動し、成果を得ることができた。第1学年から始まったDS（夢探究）の時間では、生徒が落ち着いて振り返る時間の確保が課題であった。また、SNSをはじめとした社会環境の急激な変化に伴い惹起するさまざまな諸問題を未然に防ぐために生徒会が中心となって啓発活動を進めたが、今後は専門家の知見も得ながらより一層の取り組みを進めることが求められる。 学び続ける教員としての自覚に基づき、教科ごとの授業研修の実施や校外での研修への参加を進め、各教員がアクティブラーニングの手法を取り入れた授業改善に向けて研修を深め、実践した。しかし、全教員に深く浸透をはかるためにも、ICTの効果的な活用、観点別評価を踏まえた考査問題の改善への取り組みを一層進めることが求められる。	敬愛	挨拶の励行等を通じ、さわやかな校風を醸成する。	A
		「人権教育推進プラン」を踏まえた教育を推進し、互いを大切にする人間関係を育む。	
		郷土の歴史を知り、郷土への誇りと愛着をもつ生徒に育てる。	
	邁進	学習習慣を確立し、意欲的に学び続けることのできる生徒に育てる。	
		部活動と学習の両立に努め、持てる力を最大限伸ばすことのできる生徒に育てる。	
		進路目標を確立し、夢の実現に向け邁進することのできる生徒に育てる。	
	参画	現代社会への関心と課題解決への意欲をもつ生徒に育てる。	
		社会の一員として主体的に関わろうとする生徒に育てる。	
		次の社会や文化を担う気概と力量をもつ生徒に育てる。	

	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
（1） 学校運営	①「学び続ける教員」としての自覚と実践を促すための研修を推進する。	教職員が教育研究所等の研修会や教科等の研究会に積極的に参加し、その研修の成果を教職員間で共有できる状況をつくる。校内外の研修への参加回数が6回以上の教職員が半数以上であればA。	A	A	計5回の全体研修会を計画したが、最終的に4回の実施となり、計画通りには履行できなかった。しかしながら、4回の全体研修会（特別支援教育、ICT、進路指導、生徒指導）はもとより、教育研究所等、校外での研修にも積極的に参加した教員が多かった。さらに、県教育委員会指定研究に取り組んだり、各種研修会で発表したりする教員も複数名いた。校内外への研修の参加回数が6回以上であった教職員は、全体の62.5%であった。	引き続き今日的な課題をテーマとした研修を企画し、計画的に実施したい。部活動等における事故防止のため、部活動の休業日設定の意義や効果的な部活動指導について学ぶための研修を次年度は企画したい。同時に、交通安全や生活安全に関する取組もさらに積み重ねる必要がある。	真摯な学校運営がされており、学校評価総括表の全般にわたり、自己評価結果を肯定したい。 先生方には、より研修を深め、生徒に主体的な学びを促し、学力のみならず人間力の一層の向上を図ってほしい。 また、今後も地域と学校が共同で生徒を見守り、生徒の安全向上につながることを期待する。
	②　学校における生徒の安全を確保する。	学校における生徒の安全を確保するため、校舎内外の施設の点検、授業、部活動、登下校時の安全の徹底を図る。 授業・部活動中の事故を防ぐために必ず教員が一人は付き、初期対応に万全を期し、防災計画・緊急安全対応マニュアルに沿った体制づくりを推進する。また、登下校における事故遭遇時における適切な緊急対応の方法を身に付けさせると同時に、自転車事故の防止や不審者対応のため啓発指導を行う。 学校での教育活動に起因する負傷、疾病の発生件数が昨年度(74件)の90%(67件)未満であればA、昨年度を上回ればC。	B		校舎内外の施設の安全点検は日々実施し、不備な箇所については事務室と連携しながら早急に改善に努めている。また、登下校時における交通安全や不審者対応への指導についても、折に触れ、生徒への指導を行っている。学校の教育活動に起因する負傷や疾病による日本スポーツ振興センターの災害給付申請件数は68件となり、昨年度の74件よりやや減少した。事故発生時の連絡や対応、報告書の提出等は適切に行われた。		
（2） 学習指導	①　時間の有効活用と授業における集中度を高める魅力ある授業を展開する。	部活動と学習のけじめを意識的につけさせ、限りある時間を有効活用させる。生徒の授業アンケートにおける授業内容の理解が、ほぼできている割合が80%以上でA、70%以下でC。	B	A	授業に対して、概ね集中しているという生徒が80．7%、授業内容に満足している生徒が、70．6%、受け身ではなく能動的に授業に取り組めている生徒は、57．5%であった。（授業内容理解の項目がなくなったため、自己評価は推定である。）	授業アンケートの結果から「能動的に学習に取り組めている」という回答と「この科目への興味・関心が高まった」の回答には明確な相関関係があることが確認された。これを踏まえ、生徒が深い学びにつながる授業改善に取り組んでいきたい。生徒に対しては、総合的な学習の時間(Dream Search)と連携しながら、将来の進路について探究させることにより、学ぶことの意義を考えさせ、学習意欲の向上を図っていきたい。	生徒が主体的・能動的に学ぶ姿勢を育成する取組がされている。 アクティブ・ラーニングを軸にした授業展開に加え、より先進的な学びに向けた授業改善を積み重ねてほしい。
	②　家庭学習を促進する。 （平日の家庭学習時間1時間未満の生徒をできるだけ減らす）	学校での授業を大切にさせるとともに、家庭学習の重要性を認識させ、「予習→授業→復習」の学習サイクルを定着させる。平日の家庭学習時間が1時間未満の生徒が20%以下であればA、35%以上でC。	A		平日の学校以外での学習時間が0分の生徒は、11.4%であった。ただし、塾を除いた自宅での学習時間が0分の生徒は20.4%で、約1割の生徒は、塾のみの学習に終始している。しかし、以前よりは、家庭で学習していない生徒は、減少している。		

	具 体 的 目 標	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
（３） 進路指導 キャリア 教育	①　生徒の進路第一希望の実現を図る。	各教科の授業や充実講座等を通して3年間を見通した学習計画を立て、生徒の学力の涵養を図り、進路第一希望の実現を目指す。卒業時の生徒アンケートで、進路先満足度が50%以上でA、30%以下でC。	B	B	・卒業時の進路決定先についての生徒アンケートでは、48．2　%（昨年度比－5．7 %）の生徒が「大いに満足している」と回答した。 ・9月の時点で国公立大学を志望していた3年生113名の内73名（65%）が国公立大学に出願した（昨年度比＋5 %、－27名）。	・進路を切り拓く意識と実践力を高めるため、未来探求、高校・進学先での学びと将来設計に関わる講演会・ガイダンス等の内容・方法をさらに改善して実施する。 ・進路講演会（保護者含む）の講師を、キャリア教育の観点から選定すると同時に、新たな講師開拓に努める。	生徒のキャリア醸成のために、さまざまな取組をすすめていることを了としたい。 進路第一希望の実現のためにも大学入試制度の変革に向けて研究を進め、橿原高校の特色を鮮明にするよう期待する。
	②　キャリア教育を促進する。	自己実現のためのキャリア教育を、DS、未来探求、ホームルーム、キャリア意識形成講演会、各授業等を通して実施し、自己の将来について考えさせる。卒業時の生徒アンケートでキャリア教育・進路情報の満足度を昨年度比5%以上増でA、5%以上減でC。	C		・3年生の54．7 %（昨年度比－11．9 %）が、学校の提供する進路情報について満足あるいはほぼ満足している。 ・キャリア教育に関わって、全学年でDS・未来探求の時間を十分に確保できた。ただ1学年では、DSの学習活動を基にして、生徒の考えを深めさせたり、より主体的な学習姿勢を獲得させるまでには至らなかった。		
（４） 生徒指導 教育相談 生徒会 活動	①　生徒の基本的生活習慣の確立と規範意識の向上から、克己の精神を育む。 （生徒の遅刻回数の減少に取り組む。）	自己を大切にしながら他人を思いやる気持ちを醸成させ、大きな声で挨拶ができ、元気でさわやかな生徒が多数を占める学校づくりをする。生徒の年間遅刻回数を昨年度比3%減でA、1%以上の増でC。	A	A	明るく楽しそうな生徒たちの様子から、学校生活を謳歌していることを感じ取ることができる。また、生徒たちも学びの楽しさを見いだし、学習活動やクラブ活動に主体的に取り組む姿勢が見受けられる。	現在の状況を維持するために、教員が積極的に生徒に関わる。 カウンセリングマインドをもって指導・支援していく。 特別指導ガイドラインに沿った指導	生徒の主体的な活動が活発化していると感じられる。登下校時のマナーもよく、これまで同様の指導を進めてほしい。
	②　HR活動、生徒会活動を活発化させることから、部活動や学校行事、ボランティア活動等に主体的に参加し、社会貢献に努める姿勢を醸成する。	地域や学校での行事等に、企画段階から生徒会や生徒会各種委員会の参加を促す。保護者アンケートで「学校の雰囲気がよく、生き生きとしている」と答えた割合昨年度比3%増でA、5%以下の減でC。（部活動参加率80%以上でA,75%以下でC）	B		生徒会が中心となって、文化祭や地域での地域の活動に意欲的に参加し、好評を博している。また、地域交流の行事も定着してきて、円滑な連携を図ることができるようになってきた。		
（５） 人権教育 特別支援 教育	①人権教育ホームルーム及び人権講演会の内容を充実させ、多様な人々の思いや願いを理解するとともに、自分の命も他人の命も大切にできる生徒を育てる。	参加体験型のホームルームを継続して実施するとともに、在日外国人に関する人権講演会を開催し、生徒の人権意識をさらに向上させる。11月実施の「3年人権学習アンケート」No.18～21で肯定的な回答をした生徒数の合計が全体の75%以上であればA、50%未満でC。	A	A	1年でデートDV防止講座、車イス体験、2年で自尊感情、多様な性、ひと・まち・くらし、3年で趣旨違反質問への対応についての参加体験型ホームルームを行い、全校でちゃんへんさん. を招いての人権講演会を開くことで、生徒の人権意識を向上させることができた。	①参加体験学習をさらに充実させるために、県教育委員会発行の『なかまとともに』をもっと活用していく。 ②来年度から生徒支援特別委員会の日程を年間行事計画に位置づけ、その内容を説明する職員会議も決めておく。	特別な支援を要する生徒に対して細やかな対応をしていることが感じられる。 SNSなどインターネットを介した人権問題に対する生徒の意識を高めるよう、引き続き指導をお願いしたい。
	②特別な支援を要する生徒を的確に把握し、学校全体で共通認識のもとに個々の状況に応じた適切な指導及び支援を行う。	特別支援教育推進計画に基づき、配慮を要する生徒を把握して、教職員全員で情報を共有し、共通理解のもとに対応する。そのために年間5回の生徒支援特別委員会を開き、職員会議で個々の状況と支援方法を提示して確認する。また、必要な生徒には、個別の指導計画を作成する。校内委員会の情報を全教職員に共有する機会を3回以上もつことができればA、2回でB、1回以下ならC。	A		年間5回の生徒支援特別委員会を開き、配慮を要する生徒の状況を把握して支援方法を検討した。その内容を職員会議で説明して教職員全員で情報を共有し、共通理解のもとで個々の生徒に対応できた。生徒支援特別委員会の日程調整と職員会議での説明の効率化が課題である。		
（６） 文化図書 教育	①　読書の習慣を身につけ、豊かな感性と教養を育む。	週2回（各15分）のSSR（持続的黙読）を軸に、読書の楽しさと意義を実感し、生涯にわたって本に親しむ習慣を育てる。年度末アンケートで「SSRについて」の全校平均満足ポイントが6．5ポイント以上でA、5．0ポイント以下でC。	B	A	自宅学習、部活動、習い事などで読書の時間がとりづらい（昨年のアンケート回答より）なか、SSRが本とつながる貴重な時間になっている。	SSRに関しては、時間と回数を最大限確保するとともに、開始音楽などで自然と本を開く雰囲気作りを工夫する。	読書活動の充実が、生徒の学力向上に寄与している。 文化的行事を継続させ、生徒の創造性を高める取組を進めてほしい。
	②　文化活動を充実し、生徒の想像力・創造力の育成を目指す。	文化行事をとおして想像力・創造性を育て、高校生としてふさわしい文化意識の獲得を目指す。学校全体の取組として、年間4回以上の文化行事等を実施でA、3回でB、2回以下でC。	A		若雄子祭〈9月〉、校内読書感想文ｺﾝｸｰﾙ〈9月〉、朗読を聴く会〈10月〉、校内読書感想画ｺﾝｸｰﾙ〈10月〉、図書館文化講座〈11月〉、百人一首かるた大会〈1月〉、図書館文化講座〈2月〉を実施した。いずれの行事も生徒の創造性や意欲の発露の場となった。	これまでの行事を踏襲しつつ随時検討を加えて、生徒の想像力・創造性のさらなる充実に努める。	
（７） 環境整備	①学習に専念できるよう、生徒が自分たちの手で校内の美化ができる姿勢を養う。	「汚さない、ゴミを出さない」指導を行い、日常の清掃活動をとおして生徒の美化意識を高める。生徒アンケートの校内美化の取組状況で達成度6.0ポイント以上でA、5.0ポイント以下でC。	B	B	多くの生徒が校内美化活動や身の回りの整理整頓に高い意識を持ち、日常的に取り組むことができた。全体の平均は5．3ポイントであり、大掃除など全校体制の美化活動も定期的に行うことができた。	身の回りの整理整頓を促すことにより個人の美化意識を高める取り組みから、日々の清掃活動を通して学校は公共の場であるといった意識付けにつなげていく。学校の施設・設備をきれいに使う呼びかけを行う。地域の一員としての自覚を持ち、その行動の一つとして通学路清掃活動を行う。	校内は清掃や花壇の整備などがしっかりされていて、環境が整っていると感じられる。 通学路清掃の取組は地域へも貢献しており、今後も継続してほしい。
	②通学路を含めた学校周辺の環境美化に努める。	通学路清掃等の環境美化ボランティア活動をとおして、地域に貢献する。保護者向けアンケート「学校の環境美化」で、前年度比5%増でA,5%減でC.	B		学校の環境美化、清掃が十分にできていると評価された割合が保護者アンケートの89%であった。通学路清掃については、生徒は熱心に参加してくれていたが、日程の偏りや雨天時の対応など、検討すべき点がある。		

	具 体 的 目 標	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析）及び改善方策
（８） 健康安全 教育 食育 防災	①　生徒が学校生活に専念できるよう健康な生活を送るための生活習慣について考えさせる。また、生徒の体力向上を目指す。	学校保健委員会・学校衛生委員会を開き、生徒の健康、体力の状況について実情を精査し、改善を図る。また、健康便り、食育通信の発行により、生徒の健康に関する意識を高める。体力テストの結果、全種目、各学年、男女別で全国平均を10項目以上上回った場合A、3項目以下の場合C。	A	A	健康だより等の発行を通じて、健康への意識向上に努めた。体力に関しては年々向上している項目が多く、今後も従来の取組みを進めていく。体力テストの結果については、全学年男女で上体起こしが全国平均を上回り、持久走において第2・第3学年男女が全国平均を上回った。第3学期体育実技での持久力強化の成果が現れたものと考える。	近年、多様化する生徒個々に対して、心身両面でのより慎重な支援を推進するため、教職員間の情報共有を緊密に行い、カウンセラー・専門家そして保護者との連携を常に図っていきたい。	小学校においては、支援を必要とする児童が増えているように感じられ、橿原高校の取組は有効だと考える。 橿原高校体育館は指定避難所となっており、地域としても、今後一層の連携をはかっていきたい。
	②震災、火災等に備えるための避難訓練などをとおして自らの身を守る行動の習得と防災に対する意識を高める。	生徒の防災意識を高める避難訓練を実施し、自らの身を守る行動を身につけるとともに、各教科においても機会あるごとに防災意識を高める取組を行う。	A	A	震災に対するビデオ学習を行った。また、昨年度末に設置された緊急地震速報放送システム『地震の見張り番』を利用し、より実践的な行動訓練を行い防災の知識から行動へとつなげることができてきた。	阪神・淡路大震災や東日本大震災から年月がたつに従って、防災意識が風化していかないよう、震災に対しての危機意識を高める啓発活動を継続的に行う。	
（９） 広報	① 中学校への広報活動を積極的に行う。	中学校や塾に積極的に訪問し、広報活動に努める。より多くの中学生が本校を志望するよう広報内容の改善に努めるとともに、学校ホームページの充実に努める。 オープンスクールに実施するアンケートで、「良い」が80%以上でA、70%以下でC	A	A	中学校訪問(68校)、教育委員会・中学校・塾等主催の進学説明会参加(15回)、中学校PTA来校(6校)であった。新聞・広報誌等への提供データ、オープンスクール用ポスターの作成などで、さまざまな改善を加え、わかりやすい広報に努めた。 オープンスクールで実施したアンケートで、「良い」との回答が全項目の平均値86.2%であった。	本校についてさらに深い理解を得られるよう広報の内容、方法等について一層の改善をすすめるとともに、PTA、同窓会のネットワークを活用できないか、検討をする。	日々の生徒の活動そのものが広報の役割を果たしており、今後も充実した指導を期待したい。